

序 説

私が医師になった2002年当時、放射線科レポートの多くは手書きであった。長い文章を書けば書くほど手が疲れる。良・悪の問題ではなく、物理的な制約として、記述の前に十分考察し、できるだけ凝縮して書くという習慣が自然と身についた。短文のレポートは美学ではなく、いわば生存戦略であった。

当時の読影医には個性的な人が多く、それぞれが独自のスタイルをもち、互いに一歩も譲らない気風があった。ある指導医からは「所見はもっと簡潔に書け」と指導され、別の指導医からは「もっと丁寧に記載しろ」と叱られる。両者の間で板ばさみになり途方に暮れることもしばしばであった。彼らは自らの師から受け継いだものを長年の臨床で練り上げ、そのレポート哲学を後進に伝えようとしてくれていたのだと思う。もっとも、そのなかには実にくだらない哲学が含まれていたことも確かである。しかしくだらないものも含めて、押し付けられたからこそ知りえたスタイルの奥行きがあった。

翻って現代は「人に何かを押し付けない」時代である。それ自体は歓迎すべきことだが、一方で押し付けられなくなった結果、他者のスタイルに深く触れる機会が減り、レポートのよさを表層的にしか理解できなくなっているのではないだろうか。だからこそ、こうして1冊のなかに多様なスタイルが解説付きで並ぶことには意味があると思う。

実際にほかの執筆者の原稿に目をとおして、その衝撃は予想以上であった。師から教わり、自らも長年の経験をつうじて「これがベスト」と信じて疑わなかったことと、真逆のことが色々と書いてある。SNSでしかやりとりのない顔のみにない相手ならまだしも、何十回と顔を突き合わせ、勉強会を重ねてきた信頼する仲間になった逆の持論があったりするのだから心穏やかではない。自分のスタイルはもはや古いのかと冷や汗をかく思いであった。

特に、思ったことをそのまま率直に伝えることしか能がない私にとって、「明らかな」の使い方のバリエーションや、依頼医に対する伝え方に強弱をつけるという発想はとても新鮮であった。私自身、そうした繊細な配慮は、読影の精度を高めることに注力するあまり無意識のうちに切り捨ててきた領域でもあった。

正直、私にはすんなりとは受け入れにくいものがあるのも事実である。しかし真摯に研鑽を重ねてきた方々の持論だからこそ、たとえすぐに実践できずとも、私の思考を揺さぶる力があった。私には無理だと思っていた方法論で診断業務を実際に成立させているのだから、なおさらである。自らのスタイルを公にさらすことは勇気のいる行為にもかかわらず、あえてそれをやり遂げてくれた執筆陣には深く感謝している。

20年以上放射線科医をやっていると、面と向かって私のスタイルに対する反論を述べてもらえる機会はだんだんと少なくなってきた。そんななかで長年かけて固めてきた自分のスタイルが揺さぶられるというのは、考えてみれば贅沢な経験である。読者の皆さんにも、ぜひ同じ揺さぶりを味わっていただきたい。

竹田太郎